



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

碩士學位論文

私たちを導く多文化教案

『미래의 우리를 만드는 다문화교안』 翻譯論文

濟州大學校 通譯翻譯大學院

韓日科

中尾 裕子

2015 年 12 月

私たちを導く多文化教案

『미래의 우리를 만드는 다문화교안』 翻譯論文

指導教授 坂野慎治

中尾裕子

이 論文을 通譯翻譯學 碩士學位 論文으로 提出함
2015 年 12 月

中尾裕子の 通譯翻譯學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長 김성봉 ㉠

委 員 이예안 ㉠

委 員 반노신지 ㉠

濟州大學校 通譯翻譯大學院

2015 年 12 月

목차

역자서문	2
국문초록	4
はじめに	5
本書の活用方法	7
1. 国民(一般の人・生徒)のための多文化教育	10
1.1 미디어教育(Education for Media)	15
1.2 国際理解教育(Education for International Understanding)	20
1.3 글로벌化教育(Education for globalization)	26
注釈	34
付録1 実際の教育現場で応用または活用できる授業の事例	37
미디어教育	37
国際理解教育	40
글로벌化教育	44
참고문헌	48
일문초록	49

역자 서문

결혼하고 가정을 이루고 출산하여 엄마가 되고 아이들을 키워 보니까 저의 성숙하지 못한 부분을 많이 발견하게 됩니다. 제가 목표로 하는 모습과 거리가 먼 자신을 발견했을 때 실망감이 아주 큼니다. 그런 부분은 누군가 사람과의 소통이나 관계 속에서 보이는 경우가 많은 것 같습니다. 소통의 부족, 인식의 차이, 지식 및 정보량의 차이, 정신적으로나 육체적으로나 여러 문제가 복잡하게 존재하고 있고 이런 문제들은 사람들과 좋은 관계를 구축하는 데 걸림돌이 되고 있습니다.

일반 사람들이 다문화에 대해 알고 이주민들도 자신이 사는 나라의 사람들에 대해 이해함으로써 서로 배려하고 성장하는 법을 배우는 것은 다문화이해만이 아니라 다른 갈등들을 해소하는 데 도움이 된다고 생각합니다.

다문화 관련 서적을 찾아보고 검색을 해봤을 때 아이들을 위한 다문화교육이라고 해서 외국의 문화, 생활양식, 역사 등을 소개하는 시리즈 책이 가장 많았던 것 같습니다. 그리고 이주민 조사를 실시한 보고서 등 통계보고서와 같은 책들도 있습니다. 또한 결혼이주여성이나 다문화가정의 아이들에 관한 실제 사례들을 설명한 책 등이 있습니다. 제가 찾고 있었던 내용은 지금 우리 사회에서 이슈가 되고 있는 다문화, 이민의 현황과 현장에서 본 내용을 알기 쉽게 풀어준 것, 그런 책을 찾고 있었습니다. 이 『미래의 우리를 만드는 다문화교안』은 저자가 다문화센터와 다문화가정 자녀들로 구성된 합창단 등 다문화 관련 활동을 통해서 본인이 보고 느낀 것을 전하고 그 뿐만이 아니라 문제점에 대해 어떻게 접근하고 대처해 나가야 할지 제안을 하고 있습니다. 평소에는 잘 못 느끼지만 국내에서 일어나는 다문화가정이나 외국인노동자의 문제, 일본에서의 이민문제 등을 접하게 될 때마다 저도 무관심하면 안 되고 이런 문제의 배경에는 어떤 이유가 있는지, 그리고 사회적인 이슈가 된 내용에

대해서는 저도 배우고 알 수 있도록 노력하고 어느 정도 자신의 의견을 가질 필요가 있다고 생각합니다. 그렇게 함으로써 상대방을 더 존중할 수 있고 저도 부담감이 줄어드는 것 같습니다. 걱정되는 것은 우리 아이들이 다문화가정으로서 엄마가 일본사람이어서 앞으로 마음에 상처를 받는 일이 있을 수 있다는 것입니다. 그 때 어떻게 대처하면 좋을지는 아이마다 다르겠지만 그래도 지식이 있는 것과 없는 것은 큰 차이입니다. 지식이 있는 만큼 저도 약간의 여유가 생기고 아이들을 이해하는 데 도움이 될 것입니다. 그리고 이런 이주민, 다문화에 관한 정보는 한국 일본 양국에서 더 잘 공유하고 사람들 사이에서 공감을 얻을 수 있다면 각종 문제를 해결해 나가는 데 도움이 된다고 생각합니다. 한국도 일본도 이주민이 급증하고 있습니다. 한국이나 일본에서 살고 싶어서 온 사람들이 잘 정착하고 살 수 있도록 일반 국민도 이주민도 서로를 배려하고 좀 더 살기 좋은 사회를 만들기 위한 지식과 정보, 각종 사례들은 더 공유했으면 좋겠다고 생각합니다.

마지막으로 바쁘신 가운데서도 아낌없는 지도와 조언을 해주신 교수님을 비롯해 모든 분들께 감사의 말씀을 올립니다.

2015년 12월

中尾 裕子

국문초록

원문의 저자인 이현정은 (사)한국다문화센터 창립부터 몸담아 연구소장으로, 또 다문화 어린이 합창단인 레인보우합창단의 단장을 맡고 있는 현장 활동가이다.

『미래의 우리를 만드는 다문화교안』은 제 1장 ‘전 국민(일반인 및 학생)을 위한 다문화 교육’, 제 2장 ‘다문화가정 자녀 및 이주민을 위한 다문화 교육’, 제 3장 ‘한국과 세계를 잇는 다리, 제외동포’, 부록1 ‘실제 교육현장에서 응용 또는 활용할 수 있는 프로그램 사례’, 부록2 ‘다문화가정 자녀를 위한 다문화 교육’으로 구성되어 있다.

본고는 원문중 서두 부분과 제1장 ‘전 국민(일반인 및 학생)을 위한 다문화 교육’ 중 미디어교육, 국제이해교육, 세계화교육을 번역하고 엮은 것이다. 저자가 이 책을 쓰게 된 동기와 이 책을 어떻게 활용해야 할지에 대한 설명에 이어 아이들도 학생들도 항상 접할 수 있는 미디어를 통한 교육에 대해 설명하고 있다. 그리고 국제이해교육과 세계화교육을 통해 대한민국에 대한 자긍심을 키우고 세계시민의 일원으로 어떤 마음자세를 가져야 할지에 대해 설명하고 있다.

はじめに

本書は、各番組に出演した際の放送用の原稿をもとに執筆しました。番組の出演時、網の目のように細かいスケジュールの中、一本の綱渡りのように一週間に一つのテーマをもって原稿を準備しました。どんなものでも時間に追われることで出来上がるように、大変ではあったが、時間を割き集中して執筆するのは、むしろ私の特権のように感じられました。多文化の子供たちを通じ、見て感じたことを込めながら私の人生を整理し、教育に対する熱意と熱望をとどけるための土台をつくるきっかけとなりました。

市民団体の活動を通じて、多文化教育について関心を持ちました。多方面の現場活動と事業で得た経験は、全て勉強になりました。多文化は学問的な研究対象というよりは、生き方そのものだといえます。多文化主義を掲げた様々な机上の空論は、空中分解する可能性があります。矢が刺さった人がいれば、救急車が来る前に応急処置をまずしなければなりません。何もせず、その矢がどこから飛んできたのか、矢の材料は何か、形はどうかなど調べるのは意味のないことです。もちろん、哲学的な意味を込めて理論を構成すれば現実的な政策が出されます。そうすることで暮らしの土台が固められ、安定した幸せな暮らしを営むことができます。しかし、そうする間もなく増加する多文化の人口は、私たちが考えを整理する時間を与えてくれません。

そのような点で、私はセミナーより講義が好きです。本書は講義を聞いた人の反応を見て、特に教育関係者が望む講義案に焦点を当てました。急を要する教師から、講義案がほしいと言われたことが何度もありました。様々な資料を集めてみて思ったのは、教案を作る必要があるということでした。本を書くことと講義案を作ることは大きく違います。特に放送用の原稿は、執筆をする場合に役に立たないことがむしろ多いのです。まず使用する単語が全く違います。20年間行ってきた講義と番組の出演によって、講義用のスピーチが体に染み付いていました。しかし自分に合う合わないに関係なく、一冊の本として整理するべきだと思い、ありがたくさせていただきました。

私は、(社)韓国多文化センターを創立の時から手がけてきました。研究所所長として、また多文化の子供合唱団であるレインボー合唱団長を務めながら、多くの考えと経験を積みました。共に歩んでくださった全ての方々に感謝致します。本書を出版する動機となった合唱団と塾の子供たちにもありがとうと伝えたいです。本が完成するまで助けてくださったキ

ム・ソンフェ事務総長の御恩は決して忘れません。相談や合唱団を通じて出会った多くの多文化家庭の子供たちとご家族の皆様にも感謝致します。

大韓民国は何でも一度決めたらやり遂げる熱意と気概のある国です。多文化も同じです。世界的に見ても驚くほどの速度で多文化が形成されています。韓国も多文化が全国民の2.5%以上（2011年現在）と急増しています。その分混乱する国民の意識と右往左往する社会の各分野において摩擦が起きています。多文化は韓国にとって弊害で、なくすべきだという意識と、過剰な愛情と関心で国家の概念や祖国までも忘れてしまうアイデンティティーの忘却、そして無関心の三重奏が起っています。

多文化が早く定着し発展するために最も重要なことは、育つ世代の教育です。彼らを正しく教え、新しく変化する世の中を導いていく教師や講師、また教育関係者や教育企画者の役割が重要です。教師の現実的な苦衷を察し、変化の早い社会について教える方法をアドバイスしたいと思いました。実際、資料や教案または写真資料でもいいのでほしいと言われる方が多くいらっしゃいました。正しい教育のためには対象者と教育の目的、現在の社会的な問題、そして教師の教授法などを勘案しなければなりません。そうでなくても教師の仕事は多いのですが、学校教育に必ず必要な内容だと思い、勇気を出して執筆しました。執筆の過程で社会での需要が更に多いことがわかり、企業や公務員に講義をしながら一般人、市民、国民に多文化を理解することについて伝えたいという思いが強くなりました。多くの多文化関連の書籍と論文があり指針となっている中で、自分の本が混乱を招くのではないかと出版を前に怖気付きもしました。

しかし、韓国の機軸が変わろうとしています。このような過渡期に大韓民国の国民として世界市民として少しでも責任を果たしているという自負を胸に、それを伝えようと思います。ただ、韓国の多文化の速度が何しろ速いので、日ごとに変わる変化・推移、増加速度、統計数値などを出版するまでの過程で何度も修正しなければなりません。出版後も数値などは当然変わってしまうので、その点は読者の方々にご理解いただけたらと思います。

2011.08

8月の雨を眺めながら、多文化研究所にて

イ・ヒョンジョン

本書の活用方法

本書は学校など教育の現場で、多文化を理解するための授業に活用できるように作られました。厳密には、教師用または講義用の多文化案内書でありガイドブックです。時代の変化に合わせ多文化教育が必要という差し迫った状況で、方向性もなく何をどうすればよいかわからない教師のために作るようになりました。多文化教育は実に内容が多岐にわたります。しかし本書は、学生(教育生)の教育を目的に作りました。将来、私たちの中心となる彼らのための教育は何よりも重要だからです。

学生が対象となる多文化教育の教案として、扱う内容をそのまま参考にして指導できるようにしました。実は本書は多文化子女のための教育指針、または教育研究書として執筆を始めました。しかし対象は広範囲かつ立体的につながりがあると思い、教育対象は全国民になってしまいました。多文化子女の学校内や周辺での差別やいじめによって感じる悲しみは、学校での成績不振へとつながり、萎縮してしまった状態では決して自尊心や自信を持つことはできません。両親を恨み、温かい家庭どころか社会に対する反感ばかり大きくなるので、多文化子女のための教育は全国民を対象とした教育にならざるを得ません。韓国人の子供が、むやみに言う言葉「自分の国へ帰れ」、「貧乏な国から来たママ」、「ホームレスみたい…」、「汚いから横に来るな」。これらはまだましな方です。これよりもっとひどい言葉を浴びせられ、多文化子女たちは心に傷を負います。実際に筆者も経験しましたが、このような言葉は合唱団の子供たちの口からよく出る言葉でした。このような言葉を言う子供たちの両親も、たぶん知らず知らずのうちに家でそのような言葉をむやみに言って、その雰囲気を感じ取った子供たちは、何気なく簡単に言うてしまうのです。そのため保護者の教育、多文化家庭の韓国人配偶者の教育、義父母の教育も当然必要になります。また、社会のさまざまな分野で出会う一般人の教育も各職場で必ず行うべきです。教育の現場にいる校長、教師の多文化に対する認識が最も重要です。このように見ると、多文化子女一人一人のために皆が認識を新たにしなければなりません。

本書は国民的な合意を導き出すための目的を持ち、全ての子供たちのための案内書でもあり、教師のための教育指針書ないし全国民の多文化ガイドブックとして活用しても差し支えありません。教えた内容があれば、順序に関係なく見せてあげて活用すればよいの

です。どのような内容も全て重要で、関連性が必要です。ただ大切なのは関心を持たせて動機を与えることです。偏見をなくして社会的な融和をはかるということは、すでに知識ばかり多く頭の固い社会人には難しいものです。その反面、頭のやわらかい生徒に教えることは社会的にも意味があります。この教案が必要でない教師なら、どの科目を教えるにしても多文化的な認識や世界理解の認識が言葉の端々に表れるはずで、最終的には、このような本が必要なくなり普通の常識となったとき、私の役目は終わるはずで、確信をもって言えますが、私たちは良くなるでしょう。もっと良い社会になるはずで、よって筆者の経験のように多文化に接することで、本当の愛国心を育てる新しい機会となることを信じて疑いません。

本書が有用な方向舵と道案内になってくれればと思います。教師が多文化教育を押し付けることがないよう、子供たちの認識と行動が自発的に変化することを願います。教育の現場では一瞬、偏見とぶつかる重要な機会が訪れます。自発的なものが望ましいのです。押し付けるとそれに対する副作用と後遺症がいつでも出てきます。なぜ私たちがこれを学ばなければならないのか、なぜ共に生きていくべきか、一緒に気づくことが最終的な目標です。

1, 国民のための多文化教育なので誰でも読める構成になっていますが、特に第1章の国民のための多文化教育(大人・生徒・移民・多文化子女)では、直接的な対象として小・中学校(3年生～4年生)・高学年(5年生～6年生)・中学生・高校生に適した内容を載せました。教師が理論と実習を合わせて指導できるようにしました。

2, 構成は、多文化子女と移民について知るための教育内容としました。彼らが実際に何が最も必要なのか、何が足りなくてもどかしいのかまとめました。特に多文化子女を教えなければならないフリースクール、多文化子女が多く通う学校で参考にしてもらいたく、また学齢期以降に入国した子女の教育を担当する方のために作りました。

3, それ以外に企業や公務員など一般人(韓国人子女、保護者、移民など)も参考にできるようにしました。国民のコンセンサスを得ることが、ある意味では学校の現場よりも重要で

す。この時代に、見えない流れを作るためです。特に職場で出会う人々や政策を行う人々などは、この時代の歴史を作る者として、その考え方は、まさに私たちの社会の流れそのものです。彼らを見て育つ子供たちは直接その影響を受けることになります。しかも正反対の民族教育や歴史教育、反共教育などを受けて育った既存の世代にとって、精神的な構造を変えるのは大変難しいので、さらに大きな努力が必要となります。

本書は順番どおり読む必要がなく、扱う部分だけ参考にしても構いません。状況に応じて、急を要する部分が各自違うためです。各章の<付録>に載せた教育の事例は、小学校、中学校、高校で活用できるよう提案したもので、理論の段階で飽いてしまった生徒が少しでも関心と愛情を持てるよう作ってみました。これを応用してさらに良い内容をつくり教育で活用するのも良い考えです。教育全般が変わらない以上、一部分だけ改善する程度で終わるかもしれません。しかし、多文化時代を迎えた大韓民国の教育が成熟する機会となることを願ってやみません。

もう一つ、本書の執筆を始めた時と執筆過程、執筆を終えるまでそれほど長い期間ではないのですが、随時出される多文化関連の数値が省庁ごとに違い、特に増加速度が大きく変わり当惑しながら、書いたものを消す作業を何度も繰り返しました。ここで提示されている統計の数値は、その当時の状況がそれぐらいだったと参考ぐらいにして、主な内容と流れ、重要性、核心などを重点的に扱っていただけたらと思います。

1. 国民(一般の人・生徒)のための多文化教育

ここでは一般の人、つまり大韓民国国民が多文化の理解度を高め、世界市民として偏狭な概念をなくし、より広く深い多層的な心をもって世界を見ることができるよう教育内容を考えてみた。特に生徒は韓国社会の未来を背負う世代なので、彼らの教育はその重要性が計り知れない。

ここに提示した各種教育は、取捨選択して状況に合わせて適切に活用できる。ただ、生徒を対象とする場合(多文化子女を含む全学年¹⁾)を指導する教師や校長など、学年別に教育の習得方法に違いがあるので難易度別に分けてみた。一般の大人の場合(政策立案者、企業の役職員、公務員、ボランティア、その他多文化に関心のある人や関心を持つべき人々)、この内容をもとに多文化的素養教育として活用できると述べておきたい。特に移民や外国人が多い工場や企業で、職員の研修目的に編集し、教育できるようにした。ここに紹介する各種教育は、基本的な材料だ。この材料をどのように料理し食事を楽しむかは、材料を使う人によるということを先に述べておく。

韓国より先に少子高齢化社会に突入した日本よりも速い韓国の多文化速度に対して、世界中が注視し驚いている。政府の移民多文化政策は長くて20年、短ければ4~5年の間に大きく変化した²⁾。特に盧武鉉(ノ・ムヒョン)政権で移民多文化政策を本格的に試み、李明博(イ・ミョンバク)政権の時に本格的に軌道に乗った。それによって、移民多文化関連の主要法令と政策も多く作られた。外国人労働者の導入と対策、結婚移住女性と国際結婚対策、多文化家族の子女問題の対策などは、多文化社会に遅く突入したにもかかわらず、驚くべき発展を見せている。

政府の政策の急速な変化は、それよりも速い多文化社会への変化を反映したものだ。自由貿易協定(FTA)締結など通商開放が、世界のどの国よりも重要視され、速やかに

進められていて、移民人口も世界で最も速く増加している。

OECD加盟国における居住外国人数および増加率(単位:千人、%) 3)

区分	韓国	スペイン	イタリア	イギリス	日本	スウェーデン	ドイツ
2000年	210	1.371	1.380	2.342	1.686	472	7.297
2008年	896	5.599	3.891	4.196	2.216	555	6.728
増加率	19.9	19.2	13.8	7.6	3.5	2.0	-1

上の表にあるように、韓国は経済協力開発機構(OECD)加盟国の中で外国人居住者の増加率が最も高い。特に、北アフリカからの難民が急増している欧州南部のスペインやイタリアよりも、韓国の外国人居住増加率が高い点に注目すべきだ。

2010年末から2011年初めに発表された資料によると、ヨーロッパの主要国の間で移民多文化政策を根本的に変更する動きが出ている。フランスはシラク大統領、サルコジ大統領など右派政権が発足し、開放的な移民政策を変更した。ドイツのメルケル首相は多文化統合政策が失敗したと宣言し、イギリスでもキャメロン首相が開放的な移民政策を根本的に撤回する意思を明らかにした。EUの主要加盟国の変化は金融危機による欧州経済の悪化によるものだと言われているが、一方で実情に合わない無秩序な移民多文化政策の限界だという指摘もある。

韓国社会でも、急激な社会変化と政策樹立による副作用への懸念が大きくなっている。世界的に見てもこれほど速さで多文化政策を打ち出している韓国は、関心の的となった。何でもあつという間に作り出す原動力はどこにあるのか、内心誇らしくもあるが注意すべきでもある。

ここで扱う多文化についてもその変化の速さに皆戸惑っている部分もあり、どのように導いていくのか、どのようにこの時代を良いものにしていくかは、私たちだけでなく全世界の関心事である。経済国として大きく発展したという証拠でもあり、激しいグローバル化の波が韓国にも押し寄せているということだ。

今や世界は垣根がなくなり、大変狭くなってしまった。全て透明なガラスの壁で、隠すこともできなくなった。急な上昇気流に乗っている中国と経済大国の日本に挟まれ、豆粒ほど小さくてその存在すらも知られていなかった過去に比べれば、状況が良くなったことは本当に喜ばしい。交通の発達と通信の革新的発展が進み、国家間で連携しなければならないことが多くなり、世界の人々はお互いに入り混じるようになった。例を挙げると、北朝鮮の核開発に対する大国間の議論と会議、交渉や対策など、あるいは、あちらこちらで発生する戦争やテロ、民衆デモ、世界金融危機、金融通貨問題、領土紛争にともなう大国間の反応と交渉や会議などがある。また自然災害や環境汚染、特に2011年に日本で起こった大地震の場合、世界各国の支援と哀悼、そして風の影響による隣接国の不安、太平洋プレート地殻変動による太平洋沿岸国家間の地震対策に対する調整と準備などがある。このように予想しにくい気候変動に対する国家間の連携及び対策など、休む間もなく起こる世界各地の事件事故は他人事ではなくなってきている。そして、先進国を中心に現れた異常な少子高齢化によって人口移動と雇用の不均衡が生じた。それによる移住で離ればなれになった人々は、また会える日を待ちわびている。

特にアメリカのウォール街がウォール街の標準を世界標準とするため作ったグローバル化論⁴⁾において、世界の資本と経済力が大西洋地域からアジア太平洋地域に移動するというアジア太平洋化現象⁵⁾は、これから活用すべき絶好の機会である。

21世紀は、様々な要因で世界がさらに狭くなってきている。欧州連合(EU)では27カ国が集まったように、東アジア文明の復活もあちらこちらで見られる。韓国(北朝鮮)、中国(台湾)、シンガポール、日本、ベトナム、モンゴルなど6カ国あるいは8カ国を含む東アジア文明圏は長い期間、自国の文明を保ちながら、ほぼ全ての外部の文化を受け入れてきたほど、世界の文明の中で最も開放的な文明圏だ⁶⁾。これに関連した著書が多く出版されるようになり、「これからはアジアが世界の中心だ」と自負し、安易に自信に満ちている点も少なくない。

良いものを自分たちのものとして受け入れようとする心は、ある変化を感じてうまく受け入れ

ようとする希望があるので望ましい。しかし、変化をどのように受け入れるかが重要だ。その時になったからといって、自然とまたは無条件で中心となり力を持つのではない。

そういう点で、今のこの時期を絶好の機会にしなければならない。この機会をどう手に入れるか、どう大きく飛躍するか、関心を注いで研究、観察、行動して今のこの時期をうまい具合に絶好の機会としなければならない。国民全てが多文化的素養で心を開き、世界を私たちの舞台にしなければならない。

古代朝鮮時代、活甓に貿易を行い独特の青銅器文化を創り出したように、百済が海洋国として発展して中国や日本と活甓に交流を行い、輝かしい百済独自の文化を花開かせたように、海上王チャン・ボゴ(張保臯、新羅の武将)が世界をリードして独自の洗練された文化を創り出したように、外来文物への開放性が築いた文化の絶頂期や天下泰平の世のように、再び羽を広げ羽ばたくべきだ。

そのためには、これまでの偏狭な教育ではなく、国民全てが多文化教育を通じてDNAを新しくして活動できるようにしなければならない。

韓国より遙か以前に多文化国家となったヨーロッパやアメリカなど、多くの国々が副作用と後遺症に悩まされている。相次ぐ移民の暴動、国民との不和、反多文化主義者によるデモ、終ることのない人種差別的な行動などで、急遽いくつかの国は「多文化主義の失敗」を宣言せざるを得なかった。2011年初め、イギリスのキャメロン首相とフランスのサルコジ大統領は「多文化主義の失敗」に言及した。2010年の年末には、ドイツのメルケル首相がドイツの多文化政策の失敗に言及した。ヨーロッパの主要国の指導者が多文化主義の失敗を宣言したのは、金融危機以降の不況による失業率の増加のためだという分析が最も多い。失業率が高くなり、移民に職を取られたと考える国民の間で反移民感情が強まっているのだ。

ドイツでは、移民のうち最も多いトルコ系移民を吸収するという社会統合政策の効果があまり出なかった。イギリスでも、インドやパキスタン系移民の統合政策は失敗した。フランスでもアルジェリア系移民などイスラム系移民の同化に対する拒否感が、最も大きい理由とされている。フランスは、他国よりも多文化を政治闘争の手段として利用する傾向が強い。サルコジ大統領は国民の反移民感情を政治的に利用しているという指摘が多い。フランスでは2005年にパリの教会で発生した人種暴動など、一連の事件が毎年繰り返して起きている。

このような中で、私たちはどう出発するべきか。ドイツ、イギリス、フランスの前轍を踏んではいけないか。今は彼らが失敗した原因を綿密に考察して、韓国に合った方向性を提示するべき時だ。

多文化問題は、人権や福祉的なものとして分析する傾向がある。それはヨーロッパで深刻になっている社会的な葛藤を見ても明らかだ。ヨーロッパの人権や福祉が韓国より劣っているという理由で起こるわけではない。むしろ社会保障制度がしっかりしていて、優れた福祉制度もある。社会的な葛藤は、意外にも宗教的な問題や国家のアイデンティティーに対する問題に起因する。ヨーロッパではイスラム圏移民の集団居住地域が形成され、政府の社会統合政策が普及しない地域が増えている。政府の統治権が及ばない地域が出始めているということだ。国境や国の法律を無視してはいけない。グローバル化というものを、全ての国々が壁をなくして英語を話してハンバーガーを食べるものと勘違いしてはいけない。よって今からでも国のアイデンティティーと政策や基調に関して、国民の合意を得るべきだろう。そうすることで国民の認識が統一され一つに合わせ、国家政策も正しく進んでいくはずだ。したがって、何よりも急がれているのが国民の教育だ。

1.1 メディア教育(Education for Media)

メディアは、いつでもどこでも開かれている道具だ。意思があり、指を動かすことさえできれば、いつでもつながり出会うことができる。

メディアを分類すると、一つは利用者としてのメディア(移民のための多国語放送のように直接的なサポートを受けたり、該当する番組を利用すること)、二つ目は視聴者としてのメディア(ドラマや映画、広告など多様な番組を視聴すること)、三つ目は技術利用者としてのメディア(映画について学びビデオカメラの使い方やシナリオ、撮影の仕方を学ぶことなど)に大きく分けられる。ここでは三つ目の技術的な教育は省くことにした。メディア教育というと三つ目の教育が全てであるかのように思われる傾向があるが、技術的な内容を習得することだけがメディア教育とはいえない。体系的なメディア教育は必要に応じて、状況や学習者、機器に合わせて取捨選択して教育に活用することができる。

メディアは誰でも手軽に接することのできる媒体だ。つまり、メディアと私たちは切っても切れない生活のパートナーだ。利用者としてのメディアを見ると、多くの移民の祖国を紹介し、彼らに祖国の放送を少しでも聞かせるのは、移民にとって大きな励みになるはずだ。

毎週、国民の700万人以上が視聴するオーストラリアのスペシャル・ブロードキャスティング・サービス(SBS・Special Broadcasting System)は、多文化社会のニーズに応えるため設立された政府交付金によるメディアサービス機関だ。SBSのテレビ放送は政府が投資し運営しているが、他の民間の投資やその他の活動による参加も認めている。しかし、商業広告や支援はラジオ放送では認められていない。主な番組は英語だが、SBSのテレビ番組の約半分が英語以外の言語で制作されている。また先住民によって自治的に運営されているインパルジャTV(Imparja Television)という放送局もある。結果的に、SBSの放送内容はオーストラリア以外の国で集められた400以上の資料をもとに制作された番組で、英語以外の言語による番組が半分以上あり、外国の視聴者も英語字幕によって放送を見ることができる。つまり68カ国以上の言語で制作し、多様な言語の論評やオンラインデジタル・コンテンツで国民の融和を支援している。また、メディアが単にメディアで終わるのではなく、社会での行事や教育と連携している。この点も大きな強みで、私たちが学ぶべき点でもある。

韓国では、EBS(教育チャンネル)をはじめとするケーブルやラジオ、インターネット放送局などが、移民のための放送(音楽や祖国に関するニュース、ハングル教育など)に力を入れている。大変望ましいことだ。また韓流ブームで韓国語を学ぼうとする海外の外国人や同胞、韓国に入国しようとする人々のためのハングルサイトの開設などが大変活発だ。インタラクティブなハングル教育や韓国語教育などの開設が大変盛んだ。これらも多国語放送につながる良い兆しだ。

次に、視聴者としてのメディアは、多文化社会に対する偏狭で間違ったイメージを一度に伝えることができ、また多文化に関する教育的で建設的な内容も広く知らせることができ、ドラマやドキュメンタリー、その他の娯楽番組や映画などで何気なく使われた内容やシーンによって移民の暮らしを間違えて伝えたり、偏見を持たせるきっかけとしてはいけない。また一方にだけ偏って問題を提起するような、例えば移民女性だけを問題にしたり、移民女性の韓国人の夫の問題点だけを浮き彫りにしたり、あるいは、特定の人物について謎にするなど、極端な面だけに焦点を当てる番組は望ましくない。つまり、私たちが自己本位で移民に対するイメージを作ってしまうおそれがある。例を挙げると、家政婦は中国の同胞(朝鮮族)にするとか、移民女性や移民を最下層の職業に設定すると、それが移民のイメージとなる。アメリカ映画やドラマを見ると、多くの黒人が最下層の周辺人物として描かれているが、そうすると「元々そうなんだ」となり、そのうち「大概そうだ」という社会的な無意識となってしまう。

テレビのコマーシャルも短時間に強い印象を与え、脳裏に焼きつける強力な力があるので、制作時に配慮する必要がある。多文化教育の主な目的はアイデンティティーを確立して偏見や間違いを正すことなのだが、メディアがこれと逆の方向に進むと全てが徒労に終わるといっても過言ではない。これは全て現実主義、事実主義(Reality)が基本となっているが、社会主導型の概念で考えると大変難しい点だ。何気なく設定したものが社会に悪影響を及ぼすとなると、これほど怖いことはない。現代人にはメディアが空気のように感じられるためだ。

私たちは、これほど重要で生活に密着した道具であるメディアを教育に利用しようとしていない。生徒の最も好きなものがメディアであるのにも関わらず、関心を持たなかった分野がメディア教育だといえる。現実的で1次的なコミュニケーションの道具として、十分な研究と教

育が最も急がれている分野だ。実は、多文化以外の内容でも生徒に対してしっかりとしたメディア教育が行われたことはない。

他の世代に比べると、青少年にとってメディアというものは暮らしそのものだといえる。したがって、青少年にとってメディア教育は大変重要で、特にこの多文化時代に彼らを教え導く道具としてメディアは必須だ。青少年教育は、彼らが社会的な偏見について気づくように指導し、正すことのできる力を育てるものだ。移民のための教育では、まず多文化と多文化人⁸⁾について、そして韓国文化について教えることが必要だ。つまり、対象に合わせた教育がメディア教育でも大変重要となる。2005年以降、韓国社会においてテレビは、時事や教養、娯楽、ドラマなどのジャンルにとらわれることなく、多文化を積極的に商品化している⁹⁾。しかし全体を包括する多文化メディア教育となるためには、まず韓国人の多文化に対する理解が必要となる。そうすることによって、韓国の現実にあった多文化メディア教育のための学問的で実践的な内容が作られる。

テレビだけでなく、本や新聞、ラジオ、映画、インターネット、ゲーム、漫画、音楽、演劇、ミュージカル、オペラ、伝統的な遊びなど多様なソフトウェアは全てメディアだ。つまりこれは、文字や音、映像や絵などを時間的・空間的に速く伝達できるので、反応がすぐに現れる。このようなメディアは、前述したように、社会的な監視機能や政治的な機能も持ち合わせている。世論を簡単に受け入れ、簡単に作り出す。メディアは、文化を伝達する機能以外にも、社会経済の構造を動かす役割も担っている。現代社会の軸であるメディアの見せる情報が全てのように見えることもあるため、その波及効果は大変大きい。

一言でまとめると、子供・青少年がメディアの否定的な影響を受けずに、健全に成長する権利は保護されなければならない。

韓国の放送通信行政も、子供・青少年の権利を保護するためのメディア行政を行うべきだ¹⁰⁾。科学者によると、過剰なテレビの視聴は、乳児の頭脳の発達と健全な情緒の発達を阻む。成長過程にある青少年の理由のない暴力や不安、不眠症などによって引き起こされる家庭崩壊や反社会的な逸脱行為の増加は大変深刻だ。情報化社会となり、幼いときに予防していれば払わなくてもよかった費用が毎年増加している。社会的な無関心に

よって大変な損失を被っている。

メディア教育によって、メディアの特性や技術的な面と影響、ひいてはメディアの生産活動に必要な能力も養うことができる。このような総合的なメディア教育は、まだ確立していない。単にメディア制作に必要なノウハウを教える部分的な教育にとどまっている。

最近ではメディアや放送関係の職業を好む生徒が大変多く、これはメディアの重要性というよりは、目に見えるものに対するあこがれが大きく作用しているためだ。例を挙げると、放送記者・アナウンサー・司会者・リポーター・気象キャスター・放送作家・コメディアン・タレント・俳優・歌手・ダンサー・モデル・プロデューサー・ビデオジャーナリスト・放送技術者などの職種に大変な関心を見せている。目に見える華やかさや億単位の収入を得られる職業、芸能人に準ずるスターとしての地位などに陶酔して最も好まれる職業となってしまった。単なる部分的な関心と陶酔現象ではなく、全般的なメディアの影響力を考えると急いで先に教育が行われなければならない。子供達は最先端に行くのに教育がこれに追いつかないのが実情だ。

テレビの視聴時に最も注意すべきことは、子供達は現実と仮想の世界を区別できないこともあるという点だ。アニメーションに出てくる小人が実際に存在すると信じ込むこともある。動物が言葉を話したり、植物や石ころでさえも人のように考え行動すると思っている。筆者の親戚にも、幼い時、当時視聴率が最高だった外国のドラマ『600万ドルの男』を見て、マンションの3階から主人公のように飛び降りて足に大けがをした人がいる。子供によって理解する程度に違いが出る。同じ番組を見ても、子供によって違った解釈をするのはよくあることだ。大人とは知覚能力において大きな差があるため、大人は気にしないようなテレビの内容でも、子供には深刻な影響を与えることが多い。

テレビは、使い方によっては大変役に立つもので、家庭でテレビを子供の教材として活用すると大きな効果が得られる。またドラマやアニメーション、その他の番組を見ることで、社会問題やある事案についてアプローチする視覚的な方法などを学ぶことができる。家庭において子供のテレビの視聴に対する固定観念を捨てなければならないのだが、家庭環境の重要な一部であるテレビを教材として活用しようとする積極的な姿勢が必要だ。子供達が、テレビを使って自らの考えを文章で表現する練習を行えば、学校の成績管理にも役に立つ。小論文が大学入試の重要な科目となり、高校まで学校のテストが叙述・論述型となり、子供達の観察力、理解力、自己表現力がさらに重要となった。大学入試の小論

文も、結局は自らの主張にどれだけ説得力を持たせ、展開するかにかかっている。子供が両親と一緒に、または学校で先生と一緒に、友人と一緒にテレビを学習資料として活用することで、論述式の考え方が幼いときから鍛えられる¹¹⁾。普通メディア教育というと、ほとんどがデジタルカメラの使い方や撮影の技術、実習、映像作りなどを教えている。しかし、ここでは既存のメディア資料をどのように見るのか、良かった点や気になったこと、初めてわかったことについて気づく機会となるよう指導する教育が、多文化時代へアプローチする方法になるはずだ。

世界旅行・探訪番組、世界の文化ドキュメンタリー、世界の気候及び環境問題、移民が出演する各種番組、移民をテーマとした社会時事番組、多文化関連行事の案内や多文化子女の日常など、多文化に接することができる番組が多くなった。このような番組に接することで、話を交わし、新しい情報について知ることもできる。また世界は一つという認識のもと友人となり、いつかは会える同じ時代に生きる者という概念も持たせることができる。また、ひどい人種差別を受けることについて間接的に感じることも教育の一環となる。途上国だといって簡単に見下していた国々の豊かな文化を見ることで考えを改め、その国に対する認識を新しく、そしてより肯定的なものになるようにしなければならない。生徒に特定の番組を家で見るようにして、その番組について「テレビ視聴日記」を書き、討論するのも有益だ。一步間違えるとただの暗記科目となり、嫌いな科目の一つになってしまう歴史の授業も、ドラマやドキュメンタリーを見てお互いに話を交わす興味深い「対話の場」にしても良い。学校の科目にはない分野ではあるが、私たちととても密接な関係にあるメディアをどのように活用するかによって、教育の質が変わる。無条件に「見るな」ではなく、どう効果的に活用して教育に応用するかは、私たちが考えるべき課題だ。〈付録にある該当の表を参考p.322〉

1.2 国際理解教育(Education for International Understanding)

キム・シニル(2001)は、国際理解教育(education for international understanding)を世界的な視点、または観点(global perspective)、文化間の理解(cross-cultural awareness)、世界的な問題や課題(global problems and issues)、世界各国の人々をつなげる国際体制(global systems)に関する教育だと考えている。マシアラス(Massialas、1991)は、国際理解教育は世界教育(global education)、原子力教育(nuclear education)、人権教育(human rights education)、平和教育(peace education)、世界秩序の教育(world order education)などと関連付けて議論することが世界的な趨勢だと分析した。世界は互いにとっても近くなり、さらに速くなった交通手段とインターネットによって全世界を一日で行き来することが可能になりつつあるため、リアルタイムで会うことが重要となった。

もともと国際理解教育は、第1次、第2次世界大戦に対する後遺症と反省、そして二度とこのようなことが起こらないよう願う思いから、「平和」を中心的な思想として始まった。人がしっかりと生きていくためには、戦争や搾取を行わず、互いに尊重し合うべきであり、そのためには他人または他国の文化や歴史、人種、習慣などを理解させる教育が必ず必要だった。国際理解という言葉からもわかるように、国際的な利害関係を推測して自国の利益につながるものとして、ややもすれば「利己的で偏狭なふるまい」によって誤解を生むこともある。しかし、このように利害得失を計算するような方法では、平和になることは決してないので、国境を越えて隣国や他国について理解させ、親善関係をつくり敵対関係や対立関係を克服することが、この教育の主題なのである。

私たちは地理の授業で各国の位置と国旗、そして簡単な歴史や主な資源などを覚えた記憶がある。世界史の授業では、何千年前の様々な歴史について短い期間で資料を広く読み、頭に入れなければならなかった。国際理解教育とは、国家間の理解のために必要なすべてのものという、「また目が回るほど多くのことを覚えなければならない」という認識を与え誤解を生む危険がある。国際理解教育は「理解(understanding)、つまり配慮」に焦点を当てる必要がある。理解と配慮によって共存と協力、平和を成そうという価値観が生まれるためだ。もちろん前述した実利の追求を狭い意味での国際理解教育だと

いうこともできる。しかし、少なくとも自分と他者の相互発展や共同の利益を前提とする自己発展と利益があってこそ意味があるなので、後者を勧めたい。つまり、これからは互いにWin-Winの関係でないと生きていけない時代なので互いの長所を発見してそれらを前面に出すと良い。

要するに、世界史及び国際理解教育は、このような視点と感性を育てるために必要な資料と教育内容でなければならない。現行の小学校の教科書は国家の実利追求と密接な内容となっている。実際に教科書には、「韓国と関係のある世界の様々な国の位置と生活様式を調べよう」という問題を出して、政治・経済・文化・地理的な面において密接な関係にある国を中心に詳しく記載されている。すなわち子供達が、まずはよく知っている国や、よく知らなければならない国を中心に教科書の内容が構成されている。国の発展のために実利追求の国際教育も必要ではあるが、これが主な目的となってはならない。外国の教科書に韓国についての記載が正しくされていないと気分を害するように、他の国を抜いたり誤った情報を教科書に記載すると、このような国民的情緒の悪循環を繰り返すことになる。

自分と他者を区別する過程で生まれる偏見や間違いが起らないようにするため、人類共通の問題を解決するため、全世界の相互理解のための内容を載せなければならない。実利にだけ焦点を合わせた教科書は偏見と間違いをさらに定着させ、最終的に人類共通の問題の解決や自国の利益を妨げるようになる。

国際理解教育の概念は、時代と世界情勢によって多様な用語と概念で説明されてきた。ユネスコは1953年の発足当時、「国際理解のための教育(Education for international Understanding)」という名称が使われ、その後「世界市民の教育(Education in World Citizenship, 1950~1953)」、「世界共同社会に生活するための教育(Education for Living in World Community, 1953~1954)」、「国際理解と協力のための教育(Education for International Understanding and Cooperation, 1955)」という用語が使われた¹²⁾。

国際理解教育に最も大きな影響を与えたと評価されるハンベイ(Hanvey, 1976)は、「習得可能な世界的視点(An Attainable Global Perspective)」という論文の中

で、国際理解教育において強調すべき世界的視点の構成要素を次の5つに要約した。視点についての自覚(Perspective Consciousness)、世界の現状についての認識(State-of-the-Planet Awareness)、異文化に対する認識(Cross-Cultural Awareness)、グローバルな力学についての知識(Knowledge of Global Dynamics)、人間の選択についての認識(Awareness of Human Choices)である。私たちは通常「国際理解教育」と呼ぶが、「世界化教育」、「グローバル教育」などと混同することもある。

今日の世界は、最先端の情報通信技術と交通システムの発達、冷戦終結と国際関係の拡大、自由民主主義と単一市場の経済システムの拡大、国境なき時代の参加者の多様化などでグローバル化¹³⁾が急速に進んでいる。だからこそ、様々な国を理解して協力すべき部分を発見し、互いに偏見を持たず出会い生きていく知恵が必要な時なのだ。羨望と畏敬の念をもって先進国について教育し、私たちよりも遅れている発展途上国は無視して見下すようなことはせず、国ごとの重要な面や相互協力できる内容などを知ることが必要だ。

アメリカでは、「グローバル教育」が80年代ごろから学校教育の場で本格的に始まった。90年代ごろの先進国では、グローバル教育、世界市民の教育、または国際理解教育¹⁴⁾が一つの中心的な教育の流れとなった。

一方でカナダ、オーストラリア、ヨーロッパなどでは、文化間の教育または多文化教育を中心に進められている。しかし、フィリピンやタイ、インドネシアなどでは、世界の中で共に生きるために必要な道徳や価値を教えることが重要だとして、特に平和教育や人権教育など価値観教育に力を入れている。最近イギリスでは、全ての学校が世界市民の教育を実施するように教育課程を編成した。ニュージーランドでは健康教育の中で社会的平和や葛藤の解決などを含め、国際理解教育を行っている。このように世界各国では、早くから国際理解教育を自国の特性に合わせて実施してきた。

国際理解教育という名前と目的を持った教育は、第2次世界大戦後、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の創設と共に生まれた。ユネスコの創設宣言は、国際理解教育の土台となった。数千万の人々が犠牲となった第2次世界大戦が、人類を滅亡させるかも

しれない原子爆弾を使用したことで終わったため、戦争防止と平和維持への関心が大変高くなり、1945年10月にサンフランシスコで国際連合が発足した。ユネスコは、世界平和と人類福祉向上のために国際理解教育を導入・強化することを決議して、様々な実践プログラムを作った。それから月日は過ぎ、教育の内容が時代に合わせて強調され、国連は2005年から2014年までの10年間を「持続可能な開発のための教育の10年」と確定した。国際理解教育は、人権教育や平和教育に次いで持続可能な開発のための教育が、今後10年以上は中心となるようだ。グローバル化の構造と性格、相互の関連性についての教育も共に強化しなければならない。

「アフリカの涙」、「アマゾンの涙」、「北極の涙」、「南極の涙」など、各放送局が先を争って涙シリーズを放送する理由も、アマゾンのジャングルが破壊されたとき全世界にどのような影響を与えるか、自分とはどのような関係があるのか間接的に示唆を与えるためだ。今日、世界市民として生きるべき私達の子供と青少年には、私達の暮らし方と世界との関連性、世界各地の全ての民族や文化、人種の間には深い関係があることを認識できるように教えなければならない。韓国の東方神起や少女時代などボーイズ・ガールズグループの歌とドラマが日本、中国、東南アジアを経て、アラブ圏そしてフランスまで進出して地域や文化が違う外国の若者を熱狂させている。私達は、共に感じて共に喜ぶ世界に住んでいる。本当に不思議なことだ。韓流だけ見ても、人の感情は似ているということに気づかされる。

外国人との事業におけるつきあいや海外勤務、国際結婚が少しずつ増えている。様々な国の人と共に働き生きることが当たり前となる時代だ。このような時代に国、民族、文化だけを理解して、外国の文化やグローバル化とその構造を知らないというのは、国際的なことについて何も分かっていないということになる。グローバル化時代において国際理解教育というのは、共に生きるために解決すべき問題が何かを明らかにし、その問題を解決するためには、どのような価値観と態度で臨むべきか教育しなければならない。

グローバル化時代が、暮らしに及ぼす直接的な変化は多文化社会の形成であり、多文化社会で共に生きる世界市民を育成するためには、国際理解教育が学校や職場で必ず行われなければならない。

社会構造が、多人種・多文化へと変化すれば、学校教育の内容や教科課程も変わらないわけにはいかない。まず様々な言語教育を実施しなければならず、多文化子女の場

合、移民である父親や母親の母国語を少なくとも選択科目で学べるようにするべきだ。歴史や地理、社会科も多人種学校に合うよう改編しなければならず、特に宗教や市民意識、倫理教育においては国家主義や自国文化中心の教育から抜け出さなければならない。

イスラム教の人々が多く住むヨーロッパ社会では、もはやキリスト教だけでなくイスラム教や仏教、ヒンズー教についても教えなければならず、クリスマスだけでなくラマダンも祝祭日として教科で扱わなければならない時代となった。

もう一つ注意すべきことは、大国を中心として学習内容を編成すると、劣等意識と被害意識は残るといふ点だ。これを解決するためには、アフリカの開発途上国の立場や苦しみが何かを正しく理解して、それを解決するために自分達には何ができるのかを考える授業に変えなければならない。だからといって、単純に他の国の紹介と文化への理解、尊重や価値観の育成だけが正しい国際理解教育だとは決していえない。したがって、このような価値観や態度を培うと同時に、世界が抱えている問題に対する解決能力を養うことが何よりも重要だ。

授業は、講義中心の知識の伝達だけではなく、新聞や資料などからの情報収集、インタビュー、資料分析、シミュレーション、劇、討論、インターネットやメールでのやりとりなどを、学習者自身が能動的に参加できる学習活動を幅広く行うことが望ましい。

<知識・理解>

- ① 韓国は、政治・経済・文化・地理的な面において世界の多様な地域と密接な関係にあるということを把握できる。
- ② 5大洋6大州の位置を知り、韓国がアジアに属す国だということが分かる。
- ③ 世界の多様な国の自然環境と生活習慣について説明することができる。
- ④ 様々な具体例によって「全世界」の意味を認識する。
- ⑤ 交通・通信の発達による様々な影響と、今後の全世界の生活の変化と姿を予想することができる。

<スキル>

- ① 各地の様子について調べる多様な方法を見つけられる。

- ② 世界地図と地球儀を利用し、世界の地形の様子と特徴について知ることができる。
- ③ 各国に関する多様な資料を収集し整理することができる。
- ④ 世界的な問題の原因と解決のための取り組みについて調べ、発表することができる。
- ⑤ 韓国の伝統文化の中で世界的に知られているものと、これから世界に発信できるものについて調べた後、レポートとして作成できる。

<価値・姿勢>

- ① 世界の国々について関心を持つ。
- ② 文化の多様性を認め、尊重する姿勢を持つ。
- ③ 世界的な問題は私たちの問題であるということを前提に、問題解決に取り組む姿勢を持つ。

<知識・理解>

- ① 韓国文化の優れた事例について説明することができる。
- ② 海外に進出した人々がどのように活躍して、韓国のイメージを高めているか知ることができる。

<スキル>

- ① 世界的に知られている優れた韓国の文化について調べ、整理することができる。
- ② 世界に発信できる韓国の文化について調べ、創意的に紹介することができる。
- ③ 韓国文化を世界に発信するための方法を探すことができる。

<最終的な目的>

- ① 韓国人として世界で働くことのできる自信と意思を持つ。
- ② 共に手を取り合い生きていく時代であることを認識させる。
- ③ 互いに協力し支えあい生きていく時代であることを認識させる。

<付録の該当の図を参考 p.325>

1.3 グローバル化教育(Education for globalization)

グローバル化は一見、国際理解教育と少しも変わらないように見える。しかし、国際理解教育について前述したように、国家間の利害得失と共に国家間の相互尊重と配慮、そして平和をもとに自国の実利追求まで考えるものとして展開している。最終的には、個々の国家の概念が薄れ、世界が一つに統合することを追求するものとして、国際化または国際理解教育のさらに上を行く概念となりつつある¹⁵⁾。

国際化とグローバル化の違いは何か。19世紀末には国際化の傾向が現れ、20世紀半ば以降、欧州石炭鉄鋼共同体が設立されて地域化の傾向が強くなった。20世紀末になると社会主義圏の解体と二極体制の崩壊に次ぎ、世界貿易機関(WTO)の登場でグローバル化の傾向が一層強くなった¹⁶⁾。つまりグローバル化は、人類共通の普遍で妥当な価値を重視し、相互信頼に基づいた共同の方向性であり戦略であると考えられている¹⁷⁾。したがって、世界に対する広く深い理解と愛が必要となる。

最先端の情報通信技術と交通の発達、「イデオロギー」という壁の崩壊によって、世界は一つの生活圈へと変わりつつある。国際化は、国家と国家、そして国内の企業と企業、または個人と個人の関係が二者間の関係(Bilateral Relationship)として展開している。一方でグローバル化は、このような全ての関係が多者間の関係(Multilateral Relationship)として拡大している。

実際に国際化は、個々の国(Individual Nation)の間で台頭して、その個々の国内で経済活動を行う個々の企業間で現れたりもする。グローバル化は、国家と国家、企業と企業、そして国民と国民の間にある国境を越える。そのためグローバル化は、社会と社会、企業と企業、そして個人と個人の間で進む複合的な過程(Complex Process)だと見ることができる。

厳密に言えば、結局のところ自国の利益を考えない国はないだろう。これは人の世の常ではないだろうか。自国にはあまり関心もないのに、無理をして世界市民としての義務感の

みで財政を確保する国は無いだろう。結局は、グローバル化の本質もやはり自国の利益を確保し、自己満足の生存を保障するものであるからだ¹⁸⁾。

金泳三(キム・ヨンサム)元大統領は1994年11月、オーストラリアのシドニーで「世界化構想」を発表した。シドニー構想において金泳三元大統領は、韓国語での「世界化」の公式的な英語表記を「Segyehwa」としてハングルをそのまま英語の活字にすると発表した¹⁹⁾。普通「世界化」を英語で言うと一般的に「グローバル化(globalization)」が使われるが、この場合、世界を一つの市場として見る国際経済学的な概念に限られてしまう気がする。私達が推進すべきグローバル化とは、単純な経済的開放政策だけではなく、政治・経済・社会・文化の全ての面で先進国レベルに達するための総合的な国家戦略であり、韓国の固有の概念として理解され推進されなければならないものだ²⁰⁾。これによって出て行くグローバル化(移民、留学など)と入って来るグローバル化(労働移住、結婚移住、留学、脱北、難民など)の道が共に開けた。つまり、多文化の扉を開ききっかけをつくったグローバル化という大きな扉が、先に開いたというわけだ。

グローバル化というのは、世界の主流の文明に加わり、さらにはその方向を調整する過程だ。世界の主流の文明に加わるためのグローバル化の第一歩は、違う文化を理解することである。しかし、理解だけでは足りないと感じるほど変化が速く、入り混じってしまった。ヘルムート・アンハイアー(H.K.Anheier)は、今日のこのような社会のことを「グローバル市民社会」と名づけた。この表現は多文化のような速い変化を念頭に置いた言葉だ。(ヒョン・ナムスク、2010)

「グローバル市民社会は、家族や国家、市場の中に存在して、一国的社会や政治体制、経済にとらわれず作られるアイデア、価値、機構、組織、個人の領域である。」

このようにグローバル化は、渡らないわけにはいかない大きな流れとなった。渡らなければすぐに淘汰されてしまう。それではどのように渡るべきか、渡る方法を3段階に分けることができる。

まず、韓国の文化でない違う文化を理解する段階から始まる。(この部分が国際理解教育または国際化に該当)。そして次の段階は、違う文化に対する理解をもとに、世界を動かしている大きな流れを把握して、これに加わることだ。つまり世界の主流の文明の流れに乗るということだ。グローバル化の最後の段階は、世界の流れの方向を調整する過程だ。

ところが本当の意味でのグローバル化は、世界の文化の方向を調整するだけで終わるわけではない。違う文化を理解して世界経営の知恵を得る。さらには世界国家を建設することができるという論理に展開しなければならない。人が集まって暮らすので予測が不可能なのは当然だ。スタートの段階にある多文化は、なおさら予測が不可能だ。なぜなら、このような時代であるほど、互いに違う事情を持つ人々の様々な衝突が問題になるためだ。市場の人の移動、言語や文化が違う市民的地位(不法滞在者や短期の訪問者、長期滞在の外国人、移民など)によって他者の権利や文化までも標準化することはできない。そして、最も大きい衝突の原因は雇用だ。

ドイツでは2010年末、イスラム系移民者の中でも特に労働者に対する対処がしっかりできず、全体の失業率が高まり、移民に対する風当たりが強くなった。ドイツのメルケル首相は、多文化社会を建設して共に共存しようというアプローチが完全に失敗だったと宣言するに至った。この勢いに乗ってイギリスでは、新政権である保守党のキャメロン首相がドイツのミュンヘンで開かれた安全保障会議で、イギリスの多文化主義の失敗について言及した。キャメロン首相は、メルケル首相よりもっと率直に「異質の文化に対し、消極的に寛容したことで多文化主義は失敗して、これによってイスラム過激派が根を下ろした。また、イギリス的な価値を尊重しないムスリム団体に対して、財政支援を減らす」とまで言った。

このような反移民の雰囲気は、左派政党である労働党にまで広がっている。労働党の重鎮であるジャック・ストロー議員は、酒と薬物を利用して女性に対し繰り返し性的暴行を犯したパキスタン系男性について暴露し、「イギリス国内のパキスタン系の若者達が、幼い白人の少女達に性的暴行を犯している」と発言したこともある。特にイギリスでは2005年、ロンドン同時多発テロが発生して52人が犠牲となった。このテロは、見放されたり差別を受けた移民2世達によって引き起こされたものと明らかになった。2010年12月にスウェーデンで起きた自爆テロ事件の容疑者も、イギリス出身の高等教育を受けた移民2世だと分かり、反移民感情がさらに高まった。

一方で、2005年にバリ郊外で発生した人種暴動など、一連の暴動事件が毎年繰り返

されている。これによって国民の反移民感情も大きく高まり、支持率が低迷していたサルコジ大統領は移民に対する規制政策を強化することとなり、2011年の多文化政策はストップした。このような国々の二重苦が続く中、反多文化主義に対する反論も起きている。ドイツでは熟練工を切実に求めているのだが、熟練工の多くの仕事を移住労働者が行うことに対して政府が先頭に立って反感を示すので、労働力確保に悪影響を及ぼすというのだ。また、国際人権団体から経済の不況による失業の責任を移民に押し付けているという非難の声も上がっている。つまり、経済が好調な時は、移住労働者を受け入れて富を蓄えていたのに、経済が不調だと移民に犠牲を強要するというわけだ。

このように先進多文化国家で移民に対する賛否両論が巻き起こり、多文化は社会問題の中心となった。経済、雇用、賃金など、このような職に関する争いが、結局は人々を本能のままに行動させる結果をもたらした。したがって、グローバル化が共同善や最高の目標ではなく、善と悪をとまなう現象として現れた²¹⁾。

グローバル化は、明らかに国内外で熱い議論となったが、これについての賛否両論はいまだに残っている。つまりグローバル化を唱えたアメリカの本当の意図は、純粋に自国の利益のためであり、世界をひとまとめにするためのある種の統治イデオロギーで、社会的に大国の搾取を正当化しようとする強者の論理だという批判などがそうだ²²⁾。しかし、グローバル化が急速に進む現在の環境を無視することができないうえ、非民主主義国家の民主化と社会主義国家の資本主義化が、それをうながしたようなものだ。また情報通信と生産技術の革命によって経済問題から始まったグローバル化は、すでに金融、生産、技術、情報、文化、環境、安保、社会構造、政治など生活の至る所に影響を与えている。総合的に見た場合、国家間または部門間に存在する生産関係のフラグメンテーション(イスフン、1995)を引き起こすのだが、これはある一つの国だけが一方的に不利であったり有利である状況展開ではなく、状況別または部門別に違った利害関係を引き起こす。

グローバル化を一切拒否したり、間違った認識でいると、グローバル化を欧米化だと考えてしまう。しかし、決してそうではない。グローバル化によって英語がより重要なものとなったが、英語でだけ話さなければならない世界になったわけではなく、韓国式を全てあきらめないといけないうわけでもない。グローバル時代、互いに入り混じった中でむしろよりはっきりと

したアイデンティティーが必要だ。キムチを食べるにしても、西洋の人達が臭いとか何とか言うことも気にすることなく堂々と食べて、むしろこのように良い食べ物があることを宣伝し、自慢して西洋人も食べるようにするのだ。

世界中の人が、後戻りできない時代の流れに乗っていて、これをどのようにうまくリードしていくかは国の教育にかかっているといえる。つまり、グローバル化時代において、私たちは世界市民としての素養を学び教えていかなければならない。同じ時代に生きる者として世界市民的な素養を身に付けなければならぬ運命にある。

最終的には、グローバル化が私たちの生活に定着して、「世界的に考え、国家的に行動する(Thinking globally, acting locally)」意識革命と行動指針につながらなければならない。このように私たちの生活と文化に根を下ろした時、本当のグローバル化が定着したといえる。

それならば、学校では子供達にどのような概念を持たせるべきか。

一つ目に、グローバル化時代に適切に対応するため、韓国の教育を世界的レベルへと質的に発展させる必要がある。今までの制限されてゆがめられた内容を捨て去り、グローバルな広い視野を養えるよう改編しなければならない。先進国中心の重要な事柄だけ暗記するグローバル化はありえない。試験対策だけでグローバル化は成し遂げられない。子供達が希望を持ち、夢を叶えることのできる機会と動機をつくってあげないといけない。

二つ目に、グローバル化時代であるからこそ韓国のアイデンティティーをよりしっかりと守り、韓国ならではの美を高めることが目標だ。これまでの韓国の伝統に対する偏った狭い意識から抜け出して(伝統芸能の扇の舞やサムルノリ、朝鮮時代の韓服だけが韓国の伝統であるかのように見せている。それよりもっと多様な衣装や見る価値のある文化が発掘されずにいる)、豊かな韓国文化を発掘することが重要だ。そのためには、子供達の創意的な発想とアイデアを引き出し、これに対する機械的な評価は行わず、彼らの創造性をたくさん褒めてあげなければならない。そうするためには、私たちの建国理念をより確実にして、確固たる宇宙概念がある私たちの精神をむしろ誇らしく思うようにするべきだ。檀君神話に対する私たちの誇りを迷信だと考えて(例を挙げると、朝鮮王朝末期～大韓民国政府樹立前後のように)、西洋から入ってきたキリスト教やフロンティア精神だけが現代的であると言うべきではない。私たちのものを捨て去り、西洋のものを選ぶということがグローバル化とは決して言えない。むしろ、失った私たちのものを取り戻すべき時だ。そして、互いの多様な文

化を吸収し共有できなければならない。

三つ目に、世界市民の観点で考え、行動することのできる開かれた心と文化意識を持つだけでなく、国際的なコミュニケーション能力も併せ持たなければならない。バイリンガル、トリリンガルが可能な多文化子女については強みを生かし、彼らを教育して人材として育てなければならない。良い事例を挙げて希望を与え、両親が韓国人の子女には彼らを尊重する姿勢を教えるようにする。

四つ目に、中央から地方への権限委任によって、教育の自律と分権の原理が実践されなければならない。グローバル化時代に私たちに求められるのは、世界市民としての資質と指導力だ。また、世界の様々な民族と共に平和に暮らすために必要な平和教育が求められている。英語だけが最高の言語だという偏見から抜け出し、英語圏の先進国だけでなく発展途上国に関する教育も積極的に行われなければならない。

一方で「世界的に考え、地域的に行動する(Think globally, act locally)²³⁾」のように、地域化についてより建設的で積極的な概念を持てるようにするべきだ。これは集中統制から分散自律の拡大へ、画一化から多様化への流れと同じだ。教育の地域化という視点において教育自治が新しくなり、さらに向上しなければならない。

企業関係者には、グローバル化は全世界的により自由な企業活動のため全ての障害を取り除くという、前向きな意味として捉えられている。働く労働者の立場で見ると、むしろ全ての障害が取り除かれる(一つの世界という概念の中で)というのは、世界的な大競争時代における生存闘争という意味になる。一方、このようにグローバル化は社会の各種の改革と関連性を持つことになる。世界的な大競争の中で生き残るため、企業や労働者は以前より強力な競争力を求められ、その競争力を高めるため各種の社会改革が推進されることになる。労働力の質と能力を高めるための教育改革が論じられ、経営の柔軟性と労働者の労働意欲を高めるための労働改革、経営改革、労使関係改革などが推進されるのも同様に理解できる現象だ。欧米の先進国だけでなく韓国社会でも起こっている労働の合理化、公共部門の民営化、政府の規制緩和など一連の改革は、グローバル化が私たちに求める一種の競争力強化のための努力による産物だと見ることができる。

このような一連の状況の中で、私たちは企業と労働者との乖離に気づく。つまり大競争時代において、各種の規制緩和や撤廃を通じて企業の競争力を高めようとする企業関係

者にとって「暮らしの質のグローバル化」を主張する労働者の要求はうれしいものではない。このような葛藤関係は、いわゆる裕福な国より「グローバル化」によって裕福になろうと努力する発展途上国において、いっそうはっきりと表れる。

グローバル化革命を急速に推進することになった要因は、交通、通信、観光などの発達である。世界は狭くなり、一日で行き来できるようになった。最先端の情報通信技術とイデオロギーという壁の崩壊で、世界的な広域単位の欧州連合(EU)、北米自由貿易協定(NAFTA)などが発足して、1995年には、国境のない世界経済システムである世界貿易機関(WTO)も創設された。国境に守られていた中で作られた発想や制度的なシステム、習慣ではまともに生きていくのが難しい、新しい時代が私たちの前に迫っている²⁴⁾。

グローバル化は、全ての国の人々が国境を越えて、暮らしの基盤を世界へと広げていく現象であるので、世界全体が人類共同の理想実現に向けて自由に交流し、協力して実現していくのである。このようなグローバル化には、世界市民教育が必要とされている。グローバル化時代に私たちに求められているのは、世界市民としての資質と指導力を備えることであり、多様な民族と共に平和に生きていくのに必要な平和教育だ。このような教育は、既存の民主市民教育とある程度関連性がある。

子供達が、正しい世界観を確立するためには、まず世界自体を客観的に見る必要がある。世界は、一つの文化圏と民族によって構成されているのではなく、多民族・多文化が入り混じって構成されている。この最も基本的な事実を認識して認めるべきなのだが、そうならず世界各地で人種や種族の文化の違いや集団の利益のため紛糾が起こり、むしろ深刻になっている。相手に対する理解と包容力の不足によって、世界各地で様々な紛争やテロなどが起き、それによって大勢の人々が苦しんでいるという事実は、子供達が世界についてまず初めに何を学ぶべきか物語っている。世界の相互依存性と調和、自分とは違う人々と共に生きることを理解するための多様な面に関する認識が必要だ。子供達は、これから大韓民国の国民として、また世界市民として学ぶ姿勢を備えるべきだ。

1) 世界的な観点、または価値観に対する認識を高める

子供達が、多様な文化圏における家族構成員の役割や高齢者への接し方、子供の養育、食習慣、結婚の風習などを比べ検討する必要がある。これによって、子供達が社会の慣習や価値観を調査して、様々な観点に対する洞察力を身に付けるだけでなく、自分の観点が世界で唯一のものではないという事実気づくことができる。

2) 世界の現状に対する認識

世界で起きている事柄について認識する必要がある。最近の出来事(地震や津波、紛糾、伝染病、またはフェスティバルやイシューなど)を調査して、起きた地域を地図で調べ、歴史的なつながりと事件の関連性を考える過程で、世界の問題について客観的な判断が可能になる。また、一つの文化に対する考えをさらに深めることになるだろう。

3) 躍動する世界に関する知識

世界で起きる出来事や問題などを通じて、全世界が体系的で相互依存している事実を理解しなければならない。出来事の流れを継続して見守り、文化、環境、経済、政治、技術的なシステムがどのように動くのか理解して、これらを比較することのできる能力を開発できるようサポートしなければならない。例を挙げると、日本で大地震が発生した時、世界市民としてどのように対処すべきか、自分達はどのような姿勢で彼らを見守るべきかなどを共に考えることができる。

4) 人の選択についての認識

心は世界に向け、実践は生活の中でできるように指導しなければならない。環境問題の解決策として、空き缶や紙を無断で捨てたりせず、リサイクルする習慣を身につけさせるなど、人の選択した行動が世界に影響を与えるということを認識させる。<付録の該当の図を参考 p.329>

注釈

1. 多文化教育は、幼児から大学生まで全て含まれる。しかし、ここでは小学生から高校生までに限定した。幼児は、保育園や幼稚園で入学予定の小学生として、小学校低学年のものを応用し、大学生は社会に出ていく前に、ボランティアやその他活動で習得する機会が多いため省略した。
2. 産業研修制で外国人労働者が導入されたのは1991年で、外国人労働者雇用などに関する法律は2003年、外国人処遇基本法は2007年、多文化家族支援法は2008年に制定された。(キム・ソンフエ、2011.05.26『移民政策討論』から再引用)
3. 経済協力開発機構(OECD)、国連の調査資料。多文化政策委員会の会議資料、教育。
4. アメリカを非難するため、グローバル化を否定し、多文化を否定する反多文化主義者に同調することはない。前述の様々な理由で、時代の流れによって、どの国でもグローバル化が形成されたはずだ。そして、アメリカでなくとも他の大国が迅速に実行しただろう。そういう点で、グローバル化は時代が求めることであり、流れだと見なければならぬ。反米主義に陥るのは、再び井の中に入るのと同じだ。
5. ファン・テヨン(2011) 『孔子と世界』 p.33
6. ファン・テヨン(2011) 『孔子と世界』 p.26
7. チョ・ジュニョンPD(2010.11.14.)、平和放送開局22周年特別企画3部作『多文化時代の移民子女教育、このままでいいのか?』
8. 移民や外国人などを指して多文化人と呼ぶ。多文化人とは、多文化家庭の国際結婚移民や移住労働者、多文化家庭子女(多文化子女)、留学生、華僑、在外同胞、難民、不法滞在者、脱北者も含めた総称だ。
9. アン・ジョンイム、チョン・ギョンナン、キム・ヤンウン(2009) 『多文化とメディア教育』
10. コ・スンジュ(2008) 『コ・スンジュのメディアリテラシー』
11. 父母が、子女に対してテレビの視聴を積極的に促し、子女の知的発達をサポートするという方法は、アメリカのPBS(Public Broadcasting Service)の年齢別メディア教育の指針資料などが代表的だ。PBSは、本部がバージニア州にある非営利団体で、アメリカの348の公共放送が設立して運営する機構だ。PBSは、非営利テレビやインターネット、その他メディアを合理的に活用して、視聴者の生活がより豊かになるように、教育番組の提供などの活動を行っている。PBSを利用するアメリカ人は9千人に達する。
12. 原文は、ユネスコ韓国委員会(1996) 『学校での国際理解教育』 p.22。翻訳は、新井郁男(2007) 『知恵蔵2015の解説 国際理解教育』を参照。
13. ユン・ヨンガンが整理した「グローバル化(globalization)」の概念は、次の通りだ。グローバル化は、ある特定の主体の観点からではなく、普遍的な観点から現象を記述した言葉だ。つまり、グローバル化は拡大志向の市場メカニズムとこれによる資源や人材の移動によって、近代国家の属性である領土性と主権に対して挑戦するという意味が薄れる現象だといえる。(ユン・ヨンガン、1994「世界化-民族主義の新しい地平のために」『季刊思想』冬号、pp.13~15)
14. 国際理解教育と関連して様々な用語が使われている。用語だけでなく、その意味や概念も国と学者によって受け止め方や解釈に違いがある。しかし大体は、世界的な視点や違う文化や民族に対する理解を深め、世界的な問題に対する責任意識と関心を持つように強調するという点で共通してい

る。したがって、本書では同じ範疇の概念として扱うことにする。

15. 国際化とグローバル化の概念を定めるのは大変難しいが、あえて言うならば国際化は、国境による世界秩序の構築を目標としている。したがって国際化というのは、国際社会に対して能動的に関わることで国同士の交流を拡大するという点を強調している。これは言い換えると、国の海外進出の拡大と、それに対する代価として対外開放が必然的に求められるということだ。国際理解教育で言及したように、国家間の利害得失を計算して戦略を練り、自国の利得となりうる実利を前提にアプローチしている。一方でグローバル化は、共同の利益に加え、運命共同体という前提がある点で国際化とは違う。(イ・ギョンテ、1995.12「世界化のための民主市民教育の方向」『社会科学研究』2集1号、大邱大学校社会科学研究所)

したがってグローバル化のための活動として、核開発に対して各国間で対策を練ること、異常気象や地球温暖化に対する協約、テロ対策など世界市民として共に対策を講じることが優先される。

16. チョン・サンドク(2005)『EUの理論と連邦建設』p.13

17. グローバル化について、今の時点で共通の概念は定義されていないが、ソン・ドンギュは、グローバル化について全世界が政治・経済・文化の面で一つに統合されていく過程として、地理的な概念で世界を圧縮して人類の共同意識を強化していく過程だと説明した。(イ・ジン、1999「国際社会と情報流通」『情報社会とマスコミ』)

一方でチョ・ミョンネは、グローバル化とグローバリゼーション(globalization)を違う概念で定義しているが、グローバル化を国境を越えて人とモノと情報の交流が活発になり、国際競争が激しくなると同時に、国際協力や分業が定着する過程を指すとした。そしてグローバリゼーションは、グローバル化がさらに進んで経済・政治・文化・環境の全てが、世界的な規模で一体化していく現象だと定義した。Krasnerは、グローバル化について意見(idea)・人・商品・要素などの国際的な流れの増加だと考えた。またグローバル化とは、人権の正当化、取引のデジタル化、通信速度の増加、全世界的なNGOネットワーク、感染症、国際資本市場の成長、地理的に分散した地域における生産の増加、MTVの普遍的な利用の可能性、移民の増加(不法移民も含む)など、状況の展開が混ざり合うことも指すとした。

18. つまり、人の生活圏や儀式および文化は、その範囲を越えて外部志向的(outer-oriented)現象を起こして、それによって「共に生きる知恵」を身につけなければならないと理解していても、結局は国や民族を維持するための動きがグローバル化だということだ。つまり、グローバル化の中で国や民族は、国境を維持し、他の文化から固有の文化を守り発展させようとする内部志向的な現象が現れているのだ。(パク・テアム、1996「21世紀に備える初等社会科の市民性教育」『初等社会科教育』8、韓国初等社会科教育学会、pp.8~9)

19. 金泳三(キム・ヨンサム)元大統領は、外国人には聞き慣れない「Segyehwa」という言葉を英語で「Total Globalization Policy」と説明したことがある。つまり「Total」という単語から単純に製品の質だけでなく組織・経営など企業全体とつながっている点に注目したようで、「Policy」はグローバル化が単なる現象ではなく、韓国の全体的な政策の意思であることを強調するために使用したようだ。しかし、このように「Segyehwa」と「globalization」の概念を区分するために、「Total」と「Policy」という単語を付けたにも関わらず、意味が明確でなかったため、韓国市場を完全に開放するという意味の誤解を招く可能性があった。このような問題のため、韓国的なグローバル化を「Segyehwa」と表記した金泳三元大統領の世界化構想は批判を受けた。

20. 金泳三元大統領は1995年1月25日、世界化推進委員との懇談会で「世界化構想」を発表することで「Segyehwa」概念に関するそれまでの抽象的な論争を終わらせ、「Segyehwa」を韓国が世界の中心国家となるための国家発展戦略にすると同時に、「新韓国」をつくるための戦略であると明らかにした。国家発展・新韓国創造戦略としての「Segyehwa」を次のように提示した。

一、Segyehwaは、一流化だ。Segyehwaは、大競争において世界一流・世界最高になることだ。政府・国民・企業・学校・地方・政治・経済・社会・文化・意識の全てが世界一流・世界最高になることだ。

二、Segyehwaは、合理化だ。Segyehwaは、非合理的で間違った制度・意識・慣行を正すものだ。これまでの開発独裁体制下で緩んでしまった基礎秩序、誤った経済秩序や意識の・慣行・制度を改革して合理化することだ。

三、Segyehwaは、一体化だ。Segyehwaは、皆が一つになり共に努力することだ。階層や地域、そして世代の壁を越えて、皆が一つになることができれば大競争において勝つことができる。社会的な対立や分裂の中でSegyehwaは成功しない。大企業は、中小企業を支援しなければならず、都市は、農村の発展を支援しなければならない。Segyehwaは、まさに共同体的な連帯感と所属感を高めしてくれるものだ。

四、Segyehwaは、韓国化だ。自国の門戸と伝統を知らずに、21世紀の国際人となることはできない。韓国的な固有価値と伝統文化をもって世界へ進むことが、正しいSegyehwaだ。

五、Segyehwaは、人類化だ。Segyehwaは、成熟した民族と国家が自らの関心領域を世界や人類の問題へと拡大していく過程だ。人類が直面している共通の問題を共に考え、解決するために積極的に努力することが、まさにSegyehwaだといえる。

したがってSegyehwaは、グローバル化(globalization)の韓国的な概念で、国民と政府が一つとなり、国力を総結集して統一した世界中心国家をつくるための国家発展戦略であると同時に、民族生存戦略である。(韓国公報処、1995.02.07『大統領の世界化構想』p.7)

21. バク・キドク(2006)『韓国民主主義の理論と実体』p.180

22. 国際化とは、民衆の犠牲を強要して民衆の政治的な意思表示を事前に遮断しようとするイデオロギーだといえる。(ヨム・ムウン、1994、バク・キドクの上掲同書より再引用、p.182)

23. 1991年にノルウェーの首都オスロで開催された国際地方自治体連合(IULA)世界総会で、「世界的に考え、地域的に行動しよう」というスローガンを掲げたことがある。このような原理は、相反する二つの規則を結合した一つの姿勢を見せた。今日のこのようなグローバル化と地域化を全て同じ一つの現象と見て、GLOCALIZATIONという用語は新しく作られている。

また国家主義の退潮、電子民主主義による代議民主主義、地域化時代の発展力が民主政治に肯定的な影響を与えて、一方で大競争の加熱で集団や階級間での不平等が深刻となり、労働階級組織の瓦解、そして過度の情報化による個人への私的な統制の危険性を否定的な影響と評価した。(イム・ヒョクペク、1995)

24. 大統領諮問教育改革委員会(1995)「新教育体制樹立のための教育改革」『第2次大統領報告書』

付録1

実際の教育現場で応用または活用できる授業の事例

メディア教育

小学校低学年(3～4年生)

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
スヌーピーのアニメによる多文化教育	テレビ、スヌーピーのアニメ、クレパス、スケッチブック、紐やゴム紐、はさみ、のりなど	色々な友だちと一緒に過ごすことが大切で面白い。	多様性の指導
<p>応用：まず、テレビやDVDでスヌーピーのアニメを見せる。楽しく見るようにして、スヌーピーのアニメに出てきた色々なキャラクターを選び、多様な色で描いてみるようにする。自分の好きなキャラクターの絵を描いて、なぜ好きなのか話してみる。自分の好きなキャラクターを描いて仮面を作る。仮面をつけてアニメで見た内容を再現してみる。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
色々な人種になってみる	自分の好きな漫画の本、クレパス、色鉛筆、スケッチブック、紐やゴム紐、はさみ、のりなど	自分のなりたい人物、または好きな漫画の主人公や童話の登場人物など、多様な存在(色々な人種の人、漫画のキャラクター、宇宙人など想像上の存在でも誰でもよい)を描けるように幅を広げて固定観念を捨てさせる。 そしてなるべくクラスの中で同じ人物が重ならないようにする。	多様性の指導
<p>応用：班別に童話や漫画を選び、内容について共有する。テレビでアニメを見たり、漫画や童話を一緒に読んだ後、班で話を一つ選び各登場人物の仮面を描く。そして班別に仮面をつけて、話を作り簡単に発表する。または、個人別に多様な仮面を無作為に集めて話を作ってみるようになるのもよい。</p>			

小学校高学年(5~6年生)

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
例:EBS放送『チョウムの草の葉学校』(これと類似の番組)	テレビ、『チョウムの草の葉学校』	過度に暗い内容や希望のメッセージを伝えることよりも、多文化家庭が身近な存在として認識されるようにありのままの話を伝える。	融和の指導
<p>応用：アニメを見て感想を書いたり、絵に描いてみる。「自分がこの多文化家庭の子ども(主人公) だったら、たぶん～していただろう」と仮想のシナリオを作ってお互いに発表する。または、実際に話を作ってみる。班別に劇を試してみるのもよい。</p>			

中学校

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
芸能人やスポーツ選手の中で外国人や多文化人を探してみよう	インターネットや各種資料	彼らの仕事とそこに至るまでの過程について調べる。定着する過程で大変だった点に焦点を合わせる。 また、外国で活躍する韓国人についても調べる。 そして、彼らの外国で成功するまで大変だったことについて調べる。	世界化と多文化を同時に感じてみる。
<p>応用：文化の交流を通じてお互いに混ざり発展していくことを認知するよう指導する。外国出身の芸能人と、外国に進出して韓国のイメージを高めた芸能人を同時に調べる。インターネットの資料を持って来る。興味を持つように自分の好きな歌手の歌を歌ったり、ダンスを踊る。または、スポーツ選手を選び紹介したり、自分の夢がスポーツ選手ならば、それについて話してみる。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
K B S 放送・歴史スペシャル『外国から来た姓氏』または『チャン・ボゴ』	テレビ、KBS 歴史スペシャル、DVD	外国人で帰化した人について知り、自分たちも知らないうちに共に生きてきたことを自覚する。 チャン・ボゴの活躍は韓流の一部で、世界の文物を通じて交流することで発展したということを知るように指導する。	文化の発展は混ざり合うこと。
<p>応用：韓国の外来姓について調べ自分の先祖はどこから来たのか、また私たちは民族主義をどのように克服すべきか討論する。チャン・ボゴが活躍したルート(セラミックロード)を地図に書いてみる。チャン・ボゴの広大な活動範囲に驚くはずだ。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
ルネサンスの過程やレオナルド・ダ・ビンチに関するドキュメンタリー	テレビ、DVD、ドキュメンタリー	イタリア・ルネサンスの起源や発展の過程について図などで説明し、ルネサンスの代表的な人物であるレオナルド・ダ・ビンチの様々な業績を視聴覚資料で見る。 そして、文物が混在して混乱した時期に、むしろ新しい文化が創造されることを感じるようにする。	文化の発展は混ざり合うこと。
<p>応用：ルネッサンスまでの世界史も一緒に学べる。そしてレオナルド・ダ・ビンチの多くの作品と研究過程の習作や発明品などを見せ、また彼の悩みが記された日記やメモなども鑑賞する。文系・理系で分類しなくても共にできるということ。 左脳と右脳の融合という話題について話し、どちらか一方にとらわれてはならないことを教える。様々な無限の世界を創造できるという可能性について教える。</p>			

国際理解教育

小学校低学年(3~4年生)

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
世界は一つの家族	世界地図、 様々な交通手段の 写真(貼り付けるため)、 様々な人種の写真 (貼り付けるため)	世界地図を広げて交通手段を貼り付け、行く方法とかかる時間を知る。	地球上には色々な人が住んでいるということを間接的に感じさせる。
<p>応用：班別に大陸の名前を貼り付け、資料を調べる。そして班別に調べた内容を発表する。調べる際に写真やインターネット、雑誌などの写真を模造紙に一目でわかるように貼って、大陸の紹介をする。長所や短所なども紹介する。発表後、教師は様々な交通手段の資料を見せて、そこに到着するまで何時間かかるのか教える。</p> <p>そして、児童が調べた国を中心にその国についての補足説明を行う。そこに住む人種についても紹介する。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
大韓民国の紹介	世界地図、各種資料	大韓民国の代表として外国に行くと仮定し、何をどのように紹介するか班別に話し合い発表する。	大韓民国の誇りを持たせる。
<p>応用：紹介する国を選び、その国に大韓民国の代表として行くと設定する。</p> <p>大韓民国の誇れるものを集めて、資料に貼ったり絵を描いたり文を書くなどして、班別に発表する。外国人に勧めることのできる食べ物や文化、地域の紹介を積極的に行わせる。</p>			

小学校高学年(5~6年生)

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
アジアは一つの家族	世界地図、アジアの地図、世界各地の生活様式の資料	世界地図とアジア圏を拡大した地図を見せる。そして、韓国に多く移住している国の人たちのために、親しくする国としてアプローチするように指導する。	西欧文化が優れているという偏見をなくし、同じアジア圏に対して親しみを持たせる。 そして、周囲のアジア移民に対する優しい心を育てる。
<p>応用：アジア圏の多様な国家を選び、資料を調査する。 特に同じクラスに多文化子女がいるならば、その両親の祖国の長所を明確にして認識させる。多文化人に対して関心をもたせ、親しくすることで自分達にもプラスになるということを教える。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
誇らしい大韓民国の文化	ナンタの器具、テコンドー	ナンタの公演をビデオで見せて習い、実際に行ってみる。またテコンドーができる児童は実演してみる。	大韓民国の誇りを持たせる。
<p>応用：直接行って見て、紹介もしてみる。これ以外に大韓民国の誇るものを競争して発言させる。良い点を限りなく挙げられるようにリレーゲームをしてみる。ここで他の人が挙げたものを言ったとき無効として、何でも考えて発言するように指導する。 誰かが何を言っても、決して非難や否定をしてはいけない。どのような発言でも尊重して褒める。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
世界は一つの家族	世界地図、写真資料	世界地図を見て班別に国を決め、その国について調査する。 その国の現在の状況や姿などを見て、そこに住む友人に手紙を書くとしたら、どのように書くのか考えて書いてみる。	地球上には色々な人が住んでいるということを間接的に感じさせる。
<p>応用：該当する国の興味のある分野について各自調査する。それをもって、その国に友人がいると仮定し、手紙を書いてみる。班(人数は偶数)の中で誰でもよいのでその手紙を送って、手紙を受け取った班の生徒は、手紙に返事を書かなければならない。返事を書くためには、インターネットでの資料調査が必要だ。調べた資料をもとにしっかりと返事を書かなければならない。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
親しくすべきアジアの国々	アジアの地図、文化・資源・企業の進出・教育などに関する資料	様々なアジアの国々の文化や資源、長所・短所を把握して、共に協力した場合、お互いにとって良い点を模索する。	アジアに対する偏見をなくし、親しくすべきだという認識を持たせる。
<p>応用：アジアの国々(主に韓国に多く移住している人々の母国)について学ぶ。その国に関するもので、自国の利益とつながる可能性のあるものを探してみる。その時、韓国にとって何が良くて、他国にとってはどのような点が良いのか、互いに良い点を分かち合い共に協力して生きていくべき時代であることを認識させる。韓国に来ている多くのアジア圏の移民に対する冷遇を改め、彼らが韓国に来て互いに良い点は何かについても教える。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
世界は一つの家族	関連のビデオ	世界の紛争地域について調べてみる。その紛争による影響を考えてみる。(地震、津波、または戦争、紛争など)	世界のある所での動きや小さな影響力の重要性について知る。
<p>応用：ビデオを上映して、紛争地域(問題の地域)または他の混乱状態にある地域に関する様々な内容を学ぶ。原因や過程、現在の状況に加えて、これによる世界各国への影響や韓国に与える影響などを調べ、どうすればよいか討論する。これには、決まった答えがない。</p> <p>多様な案が出るように促す。それは間違いだという指摘はしない。活発な討論文化をつくらなければならない、どのような意見も自由に発言できる雰囲気重要だ。ただし、中心的内容からはずれたときには正す必要がある。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
一緒に考えてみる	関連のビデオ	環境汚染による生態系の破壊、食糧難と人口問題、資源の枯渇問題、環境のための国際的な活動や私たちがすべきことなど	未来志向的な自負心を育てる。世界の一員としてすべきことを考えてみる。
<p>応用：ビデオを通じて深刻な環境問題を直視する。どこか一つの国だけの問題ではないということを認識させ、周辺国をはじめ世界で起こる可能性のある災害について知る。</p> <p>自分たちもどのような影響を受けるのか知らなければならない、そのための国際的な活動について説明して、自分たちはどのようなことに取り組むべきか発表する。</p>			

グローバル化教育

小学校低学年(3~4年生)

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
日本の大地震	日本地図、地震が発生した地域の資料	<p>世界を見ることのできる広い視野を育てる。ある国の災害や災難は、その国だけの問題ではないということに気づくよう指導する。</p> <p>大変な時は共に助け合い、誰にでも起こりうることを教える。そして、共に助け合って生きていかなければならないことに気づくよう指導する。</p>	<p>世界は一つという認識を持たせる。</p>
<p>応用：韓国と隣国の地図を一緒に見せて、どのような関係にあるのか一目で分かるように見せる。地震による被害の写真や映像などをもう一度見せて、被災者を助けるにはどのような方法があるか、なぜ助けるべきなのかを書いて発表する。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
中国とモンゴルから来る黄砂	北東アジアの地図、風の方向を表示するもの、黄砂に関する資料	ある一つの国だけを責めるのではなく、環境問題について共に関心を持つべきだと気づくように指導する。 黄砂が発生する地域とその原因、また黄砂を防ぐため様々な分野で行っている活動について教える。	黄砂が発生する地域の写真や活動する姿などを見せる。
<p>応用：韓国でモンゴルからの黄砂を防ぐため植樹を行う市民団体などの活動について見せて教えたり、黄砂に関する情報や対処するための方法などを学ぶ。それ以外にも火山爆発や大洪水、気候変動なども、それぞれ無関係でないことを教える。</p> <p>環境に対して細かい配慮と保護を各自で行うことが、国を愛することであり世界市民の資格であるという点に気づくように指導する。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
様々な国について知る	世界地図、国歌、国旗、あいさつに関する資料	違う国に対して互いに尊重するように指導する。その国のあいさつを覚えて、一緒に言ってみる。	世界は広いという認識を持たせる。 私たちは世界市民の一員であるという認識も持てるようにする。
<p>応用：世界地図を見せて(クラスごとに世界地図を壁に貼っておくとよい)、大きな固まりとして見る目を養うため、大陸の位置を把握させる。そして、各国のあいさつの仕方を学ぶ。</p> <p>例</p> <p>韓国：アンニョンハセヨ?(丁寧に両手をそろえてお辞儀をした後あいさつする)</p> <p>中国：ニーハオマ(両手をそろえて礼儀正しくあいさつする)</p> <p>イスラエル：シャローム(うれしそうにあいさつをして、両腕を広げ互いの肩を軽くたたく)</p> <p>インド：ナマステ(合掌してあいさつする)</p> <p>ハワイ：アロハ(互いに抱き合っあいさつする)</p> <p>スペイン：ブエノス・ディアス(互いにしっかり抱きしめる)</p> <p>イヌイト：ブデンニ(互いに鼻をこすりあう)</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
問題のある地域について知る	アフリカの地図、DVDまたは写真のあるOHP資料	世界という家族の一員としてアフリカの子どもたちの大変な苦勞、生死の境をさまよう苦しい生活を見て、私たちがどのような姿勢で生きるべきかを考える。	中学生としてどのような生活を送れば彼らの助けとなるか、そこまで考えるようにする。
<p>応用：世界地図を見せて(クラスごとに世界地図を壁に貼っておくとよい)、苦しい生活を送るアフリカの子どもたちの姿を見せ、ボランティアのため募金を始めてもよい。今の自分の立場でできることを考えつのように指導する。食べ物を無駄にしない、硬貨を集めて支援金として寄付する、ごみにして簡単に捨てないことなど指導する。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
様々な国と人の名前探し	世界地図、様々な種類の新聞、はさみ、のり、模造紙	世界には色々な国があって共存して生きているということを自覚させる。国々の文字、名前、国の名前など多様性を感じるように指導する。	新聞を広げて外国人の名前を探し、写真も一緒に切り抜いて貼る。 そして、その人物が新聞に載った理由を話す。
<p>応用：班別に行くと、さらにおもしろい。日付と関係なく、色々な種類の新聞をたくさん準備して班ごとに渡す。外国人ならば誰でもよいので、名前と写真を一緒に貼る。 班別に5人ぐらいの名前と写真、そして、その人物が新聞に載った背景などをまとめ、発表する。英語圏ではなく、珍しい言語の名前であればさらによい。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
世界の中の韓国	韓国の建築と世界の建築文化を比較するための写真、OHP、PPT	フランスやイタリアの建築美、米国やドイツ、スウェーデンの建築と韓国のマッチ箱のようなマンションを比較して、どのようにすれば創造的で韓国的な建築とすることができるか一緒に考えて絵に描いてみる。	外国の人々が訪れる各国の固有の美を私たちはどのように取り戻そうとしているか考える。
<p>応用：韓国の伝統と現代美、そして環境に配慮した未来建築をつくってみる。班別に行ってもよい。韓国のイメージを世界的に高めるには、現在の姿をどのように改善すべきか考えてみる。世界の中で韓国が独創的な国と見られるような様々な内容を調べて比較し、さらに良いものをつくれるよう勧める。</p>			

授業の題目	準備する物	教育の目的	参考
世界の中での韓国を見直す	インターネット、資料	世界で韓国を有名にした分野について調査して、それとは反対に最も不足して遅れている分野について調査する。 それらを比較してどのようにすれば発展させることができるのか考えてみる。	韓国を誇る心を育て、これからどのように準備して未来に備えるか考える。
<p>応用：現在の韓国について客観的に調査することは、時事学習にもなる。良くできていることと、次の世代にできることなどを分類して調査する。</p>			

참고문헌

新井郁男(2007) 『知恵蔵2015の解説 国際理解教育』

<https://kotobank.jp/word/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E7%90%86%E8%A7%A3%E6%95%99%E8%82%B2-182793>

石川慎一郎、石川有香(1995) 「異文化理解教育への新しい視座—世界から見た日本—」 『言語文化学会論集』

http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa_19951010.pdf

開発教育教材政策委員会(2001) 『開発教育・国際理解教育ハンドブック』 財団法人
国際協力推進協会

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/edu/kyouzai/handbook/index.html>

共同通信社(2013) 『記者ハンドブック 新聞用字用語集』 第12版

水野順子(1994) 『3年ぶりの高度成長 1994年の韓国』 ジェトロ・アジア経済研究所

<http://d-arch.ide.go.jp/browse/html/1994/101/1994101TPC.html>

吉沢寿一、紙屋剛、平間真実、橋本慎一(2000) 『多文化共生の社会をめざした国際理解教育』

<http://www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou15/15-037-052.pdf>

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html>

デジタル大辞泉 <http://dictionary.goo.ne.jp/jn/>

국립국어원 표준국어대사전 <http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>

日文抄録

原文の著者であるイ・ヒョンジョンは、(社)韓国多文化センターの設立当初から研究所
所長として、また多文化家庭の子供達の合唱団である「レインボー合唱団」の団長を努
めるなど、現場で活動している。

原文の第1章では「国民(一般の人・生徒)のための多文化教育」、第2章では「多
文化家庭の子女と移民のための多文化教育」、第3章では「韓国と世界をつなぐ橋、海
外同胞」、付録1では「実際の教育現場で応用または活用できる授業の事例」、付
録2では「多文化家庭の子供達のための多文化教育」という構成になっている。

本稿は原文の著者の言葉と第1章「国民(一般の人・生徒)のための多文化教育」の
メディア教育、国際理解教育、グローバル化教育を翻訳し、まとめたものである。著者が
この本を書くことになった動機とこの本の活用の仕方、そして子供や生徒がいつも接してい
るメディアを利用した教育について説明している。また国際理解教育やグローバル化教育
を通じて大韓民国に対する誇りを持たせ、世界市民の一員としてどのような心構えが必要
なのか説明している。